

オバサンの子どもなのに自分のキョウダイ？

グイ・ガナ語の親族名称体系

大野仁美

おおの ひとみ / 麗澤大学、AA研共同研究員

古くから研究対象となってきた意味領域である親族名称においても、グイ・ガナ語は他には見られない分類体系をもつ。

親族名称の類型論

親族名称は、諸民族の言語の具体的なデータがもっとも多く蓄積されてきた意味領域の一つだろう。生殖やそれを可能とする性的関係をもとにした人間関係のネットワークは人間社会を構成する基礎であり、親族名称体系を明らかにすることが、ある民族を理解するための必須項目であると考えられてきたからである。同時にこの意味領域は、ほぼ普遍的に共有された少数の特性（世代差・親子関係・キョウダイの長幼差・性別・婚姻関係など）から組み立てられているので、できあがった体系全体が構造として複雑であっても、体系どうしの比較対照が容易である。その結果、この分野での類型論的研究は進み、実際に私たちの社会で見られる分類パターンは、論理的に想定される数よりずっと限定されていることが明らかにされてきた。

たとえば、私たち日本人が用いている体系は、親を共有する人々をキョウダイとよび、親どうしがキョウダイである人々をイトコとする（キョウダイはさらに兄・弟・姉・妹のように、長幼の順序や性別を語彙化していることが多い）。同じように、親と、親のキョウダイ（＝オジ・オバ）とを別カテゴリーに分類する。これは、直系と傍系とを区別する体系である（図1）。

これとは異なる論理で組み立てられた体系もある。平行イトコと交叉イトコを区別して、前者をキョウダイカテゴリーに分類する体系は世界中で広く見られる（「平行イトコ」は親の同性キョウダイの子、「交叉イトコ」は親の異性キョウダイの子のこと）。このような体系では、母の姉妹は「母」（の一種）だが、母の兄弟は「父」（の一種）ではなく「オジ」である。このような分類型を二岐融合と呼ぶ（図2）。

さらに、これら二つの体系に見られる「直系・傍系」の区別と、「平行・交叉」の区別とを両方用いる体系や、逆にこれらの区別をまったく用いないものの存在が知ら

れている。後者の体系においては、自己と同じ世代の親族は皆「キョウダイ」、一世代上の親族は皆自己の「親」である（図3）。傍系において世代の違いが一部なくなっている体系もある。

グイ・ガナ語の破格性

ここで、グイ・ガナ語の親族体系を見ていただきたい（図4）。ここには、これまで述べて来たいずれとも異なる分類パターンが二点見られることに気づかれたらどうか。一つは、親の同性キョウダイをさらに当該の親より年上か年下かで二分することである。たとえば母方のオバたちを、母の姉なのか妹なのかによって区別すること自体は珍しいわけではない。しかしそういう場合は、通常彼女たちは、それぞれそろって「オバ」の下位語であるか（たとえば母の姉が「大きいおばさん」とすると、母の妹は「小さいおばさん」、あるいは「母」の下位語であるか（「大きいお母さん」と「小さいお母さん」）だ。しかし、グイ・ガナ語の場合、母の姉は「オバ」、母の妹は「（小さい）お母さん」なのである。このような分類は世界的に見ても非常に珍しい。

さらに、それぞれの子がどのように分類されるかということ、親の同性キョウダイの子は、やはりみな自己のキョウダイなのである。この点では先に見た二岐融合型と同じだ。しかし、上の世代と下の世代のつながり方で考えると、不思議なことに気がつく。

ここまで見てきた親族名称体系では、実は自分の親と同じカテゴリーに分類される人の子は自己にとっての「キョウダイ」と分類されるという点では全て一致していた。しかしグイ・ガナ語の場合、親の同性年下キョウダイのみならず、「非親カテゴリー（＝オジ・オバ）」に分類される親の同性年上キョウダイの子も自己の「キョウダイ」と分類していることになる。

この二点においてグイ・ガナ語の体系はユニークだ。念のために一つ下の世代を確認しておく、自己と同性の年上キョウダイの子は自己の子であるが、自己の同性年下キョウダイの子は自分のオイ・メイと分類される。

親族名称と行動規範

どんな名称を用いるか、というのは形式上の問題で、グイ・ガナの人たちにとって、キョウダイかそうでないか、母かオバか、というのはあまり現実的には問題にならないのではないかと、思われたかもしれない。実際はむしろ逆で、彼らにとってキョウダイかそうでないかというのは行動規範と連動しており、婚姻の可能性とむすびついている。キョウダイとの性的関係は禁忌なのに対して、非キョウダイはそのような縛りのない「配偶者候補」なのだ。両親を共有するキョウダイも、母どうし・祖母どうしが姉妹であることによって成立しているキョウダイも、等しく「キョウダイ」である、すなわち禁忌の対象であると彼らは考えている。親族名称は、その人に対してどのようにふるまうべきかを示すラベルでもある。

この視点にたってみると、親族分類の違

グイの姉妹。





ブッシュでのキャンプ(夕方)。



トビウサギ用の鈎竿を作る男性。

う景色が見えてくる。私たちの社会では、親族の範囲は狭く、配偶者候補はその狭いネットワークの外からさがしてくるものだ。しかし小規模な集団で暮らしている彼らにとって、人はみな潜在的につながりがあり、そのつながりのある人たちの中からキョウダイを避けてパートナーをさがす。彼らのキョウダイの範囲は私たちのそれよりずっと広い。そして、全く関係がさかのぼれない人と出会ったら、その人は「非キョウダイ」の親族カテゴリーへと分類される。

あなたの異性のキョウダイたちは、あなたの性的パートナーにははいけない人たちである。そして、次の世代であるその子どもたちは、「親どうしが結婚することは絶対にない」者どうしとして、配偶者候補に分類されているのだ。交叉イトコとはこのような関係のことなのである。ではもう一世代下ったらどうだろうか。親どうしには婚姻の可能性がある交叉イトコの子どもどうしの関係は——そう、実は、彼らは元からキョウダイと分類されているのだ！この体系では、自己と婚姻可能な親族の子は体系上も自己の子であり、その子と自己の子はキョウダイと分類されパートナーにはなれないと位置づけられている。

では同性のキョウダイの関係、特に長幼の位置によって異なる分類をすることはどのように説明できるのだろうか。あなたが結婚したとする。あなたの配偶者には同性のキョウダイたちがいるだろう。結婚する前は、その人たちもあなたの配偶者候補だったはずだ（つまり、キョウダイとは分類されていないはずだ）。しかし、結婚がなされた後、配偶者の同性の年上キョウダイは強い禁忌対象になるが、同性年下キョウダイは、あなたの配偶者候補のままなのである。言い換えると、同性のキョウダイであるような人たちと結婚する場合は、年上側と先に関係をむすばなければならない

というルールがガイ・ガナの社会には存在する。同じことを子の側から見ると、母の姉は、母の兄弟たちと同様に「オジ・オバ」カテゴリーに分類されているが、母の妹は、母の配偶者であるあなたの父のパートナーになる可能性がある人なので、最初からあなたの「(小さい)母」と分類されている。一方、そうはならない母の姉は、あなたの「母」ではなく「オバ」とラベル付けされているのだ。

彼らの親族名称体系は、世界のどの言語と比べても珍しい分類を有するというだけでなく、近隣の、言語の系統的には近いと

されるグループの中でも少数派である。この点で、前の記事で扱ったカラハリ狩猟採集民共通の意味拡張と考えられる食動作語彙とは事情が異なっている。そして、この体系を共有しない同系の言語集団とは、この婚姻規則もまた共有しない。では、この長幼の順序に重きをおくようなガイ・ガナの特徴は、いったいどこからやってきたのか。外部との接触が原因なのか、それとも、もともとこのグループにあったものがここにだけ残ったのだろうか。この問題についてはまた次の機会に譲りたい。

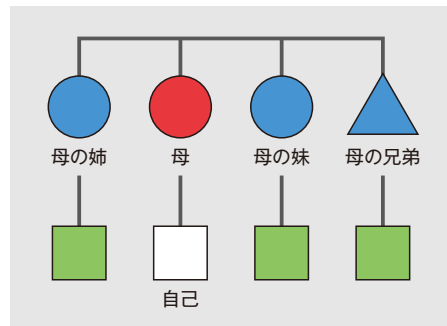


図1 直系型の親族分類。

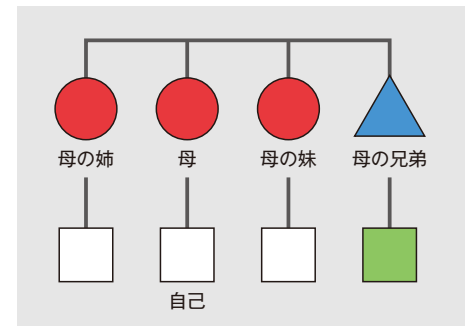


図2 二岐融合 (bifurcate merging) 型の親族分類。

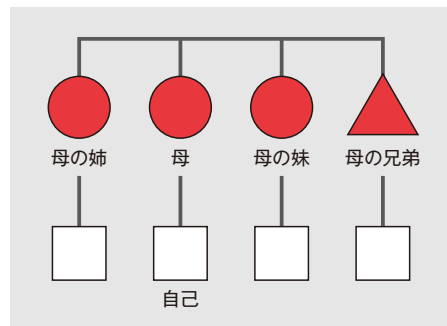


図3 世代型の親族分類。

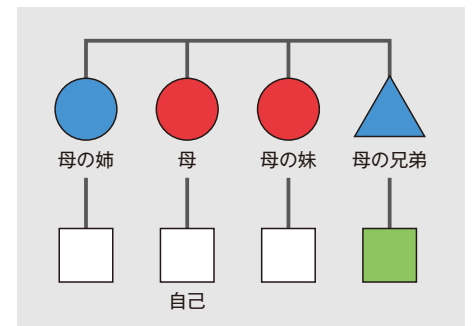


図4 ガイ・ガナ型の親族分類。

- ：女性、△：男性、□：両性。
- 赤：1世代上の親族で、親および親と同じカテゴリーに分類されるもの。
- 青：1世代上の親族で、親と別カテゴリーに分類されるもの(オジ・オバ)。
- 白：自己と同世代で、自己およびキョウダイと同じカテゴリーに分類されるもの。
- 緑：自己と同世代で、キョウダイと別カテゴリーに分類されるもの(イトコ)。